

届け 世界の果てまでも

令和2年 7月28日

No. 23

文責 校長 飯久保一男

子どもたちの頭には疑問がいっぱい

小さい子どもは、何にでも疑問にもち、親や大人に質問します。

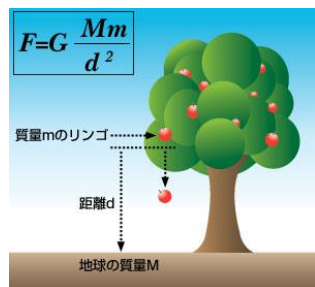
「ねえ、あれなあに？」 「〇〇ってなあに？」 「どうして□□は、△△なの？」

親も大人もはじめは喜んで答えますが、これが、四六時中続くと、だんだん面倒になり、つい軽くあしらったり、適当な答えでごまかしたりして、その場を逃れてしまいがちです。

小学校に入ると、質問がレベルアップしてきます。しかし、いつしか気づくと、だんだんと質問をしなくなってしまふものです。自分で考えるようになる、調べられるようになるということも理由の一つですが、その大きな理由は、

真面目に答えてもらえなかった親（大人）への「あきらめ」です。

聞いても答えてくれなかったり、いい加減な答えをされていたりしたら、誰でもその人には聞かなくなります。ちゃんと聞いて答えてくれる担任には子どもたちはどんどん疑問をぶつけてきます。6年生であっても、本当は、いろいろなことを聞きたいのです。疑問がヤマほどあるのです。親や大人でも答えられないような、難問もたくさん抱えているのです。



ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て疑問に思い、万有引力を発見した話は有名な逸話として残っています。当初、ニュートンの疑問に対して、周りの人は「リンゴが下に落ちるなんて当たり前だろ」と相手にしなかったという話も逸話として残されています。

発明王エジソンに教育をし、励まし、実験の楽しさを教えたのは、エジソンの母だそうです。何度も失敗をしてあきらめようかと思ったときに、エジソンは自分のことを理解してくれている母を喜ばせたいと思い、あきらめずに粘り強く取り組んだということです。

「こんな大きな木も、もとは小さな種だったんだよ…」こんな会話から、話はふくらむかもしれません。子どもが興味をもつ・もたないは別として、親や大人は、子どもに刺激を与え続けることが大切です。どこかで子どもの興味にヒットし、それがふくらんでいくかもしれません。

「なぜ空は青いの？」 「地球は何を原動力として回っているの？」

これらの疑問に正しく答えられる大人はどのくらいいるのでしょうか。子どもの疑問は、そんなものばかりかもしれません。子どもの疑問に答えられなくていいのです。わからないときには、知ったかぶりをしないで、「一緒に調べてみようか…」という姿勢も大切だと思います。ちょっとした大人の一言が、子どもに疑問をもたせ、いろいろなことに興味や関心を抱かせます。それが、『ものを考える』ことにつながっていくのです。

以前に有名な教育学の先生に「**本物の学力を一言でいうと何になりますか**」と尋ねたことがあります。その先生は一言でこう答えてくれました。

「問う力です」

今年は短い夏休みですが、子どもとの時間はとれそうですか？ 何か新しいものに出会ったとき、子どもは疑問をもちます。そのときこそ「考える力」を育てるチャンスです。子どもの疑問を大切にしてほしいと思います。

富山県青少年育成富山県民会議が、あいさつについて小・中学生に募った作文コンクールで、優秀作品に選ばれた中学生が書いた作文です。

宝物

富山市 中学1年 岩田 理子

母が弟を車に乗せて毎日同じ道で保育園に送るようになってしばらく経ったころのことでした。弟はいつも同じ時間に家の前でタバコを吸っているおじいさんが気になりました。何日も見ているうちに、知り合いになったような気がしたのでしょうか、ある日突然、車の窓を開けて、

「じいちゃん、おはよう。」

と声を掛けたのでした。それからは毎日、そのおじいさんにあいさつをするようになり、おじいさんも笑顔で弟に手を挙げて応える、ということが日課ようになっていきました。ある日、いつものようにおじいさんの家の前をあいさつをして通り過ぎようとしたところ、おじいさんが慌てた様子で母の車を呼び止め、家の中へ行き、また戻って来ました。おじいさんは奥さんを連れてきました。奥さんは母に軽くあいさつをすると、こんな話をしてくれました。

「最近うちの主人、タバコを吸い終わって家に入って来るとき、とてもうれしそうな顔をしてるのよ。私、それが気になって聞いてみたら、『ワシ、宝物を拾ったんだ。』って言うの。どういうことか詳しく聞いたら、お宅の息子さんが、毎日うちの主人に手を振ってあいさつしてくれるって言うじゃない。『じいちゃんって呼んでくれるんだ』って。私も一度でいいから息子さんに会ってみたくて、主人にその車が来たら呼び止めてってお願いしておいたの。ごめんね忙しいのに。」

と話し終わったあと、弟を一目見て、とてもうれしそうな表情で、

「あなたがうちのじいちゃんに元気をくれる子なのね。いつも気にかけてくれて本当にありがとう。

これからは、ばあちゃんにも少し元気を分けてくれる？」

と言って弟をぎゅっと抱きしめました。弟は

「ばあちゃんにもあげるよ。」

と嬉しそうでした。

それからというもの、たまに奥さんも加わるあいさつの毎日が始まりました。次第に、おじいさんの家族とも仲良くなり、

家へ遊びに行ったり、夏にバーベキューをしたりと会う回数も増えていきました。 …後略…



登下校の見守りをしてくれている方々と話をすると、多くの方が「子どもたちから元気をもらっている」という話をしてくださいます。「いつも子どもたちのためにありがとうございます」とお礼を言うと「自分が元気をもらうためにやっているだよ」と言ってくれる方もいます。

子どもたちの「あいさつ」や「笑顔」には「大人を元気にする力」があるのです。

もちろん小笠原小です 次男が6年生のとき、檜形中3年生です 中学生の長男の陸上の大会を競技場で次男と2人で並んで見ていました。

私が、白根飯野小学校から八田小学校へ異動して2年くらい経っていたころだと思います。

飯野小は巨摩中へ進学します 白根巨摩中学校や八田中学校へ進学した教え子たちが、続々と私にあいさつに来ました。

家に帰ったあと、次男が妻に漏らした言葉です。「うちの父さんって、すげえ」

